

令和4年度学校経営研修会 報告書

日時 令和4年9月29日(木) 9時30分から15時30分

会場 ホテルアソシア静岡 3階会議室 他

日程

9:30 ~ 9:45 開会式 理事長挨拶・部会長挨拶

9:45 ~ 11:30 講演「教育の多様化がなぜ起きているのか」

講師 育児・教育ジャーナリスト おおたとしまさ氏

12:20 ~ 13:20 「本県私立高校の入試制度に関する説明」

本会常務理事 兼 入試検討委員長

磐田東中学校・高等学校 校長 石川 佳彦 先生

13:40 ~ 15:30 グループ討議 (入試制度に関する意見交換)

グループ討議終了後、グループごとに解散

講演「教育の多様性がなぜ起きているのか」

講師 育児・教育ジャーナリスト おおとしまさ氏

進行 学校経営専門部会副部会長 末吉 弘治氏 (学校法人星美学園 理事長)

講演要旨

世の中の先行きへの不安感から、将来に向け子どもをどのように導いていったらよいのか分からないと感じている親が多く、社会全体が学校に対して過度の期待を寄せていると感じる。

いろいろな学校を訪問したきた中で、世間の価値観とは別のところに確固たる軸を持った学校、先生や生徒たちが主体的に校舎を使ってきたと感じる学校もある。

小学校受験、中学受験又は高校受験の選択は、その家庭の経済状況や教育に対する価値観によるところが大きい。子どもの12歳の多くの時間とエネルギーを勉強に費やすか、それを15歳にするか、あるいは加熱する中学受験を回避するために小学校を受験するという選択肢もある。受験は1回にしたいという考えも、受験自体が子どもの鍛錬になるという価値観もある。選択の際は論点を整理し、中高一貫校の充実度合や、どの段階で受験すれば、その家庭の価値観にあった学校の選択肢が多いかなどを、それぞれの家庭で考えることが重要。

これまでは学校経営の上で、ICT教育、探究教育、グローバル教育をセールスポイントとすることに訴求力があつたが、今やこの3つは学校に標準装備されているものと一般に理解されおり差別化にならない。新しい教育は10年も経てばあたりまえのものになる。新しい教育を次々に取り入れながら成功し続けている学校は、アピールと同時に学校の歴史や文化を作る取り組みを続けてきたのだと思う。いつまでの進学実績と、もの珍しさに頼ってはい、学校文化は育たないと思う。

学力観の変化は、知識偏重型の過去を否定するのではなく、重点を置くバランスの位置が変わるということ。メディアが「学力観が変わった」と煽ったからと言ってそれに乗るよりも、「私たちは以前からそのような教育を続けてきました」と発信していくことが良策だと思う。

非認知能力と呼ばれるものが学力の土台であるということとは否定しないが、これを学校で身に付けさせるということには疑問を感じている。世の中でうまくやっていくためには、数値化できる学力や体力以外にもコミュニケーションやグリッドなどの力が必要なことは当然のこと。これらの力は本来日常や社会生活において経験を積むことで身につけていくもの。しかし特定の能力が注目を集めると、それまで家庭や地域社会で育まれていたもの

が学校で教えるべきものになってしまう。過去それを繰り返してきた結果、日本の学校教育は多機能化してきた。

これが昨今の教員の多忙化にもつながっているのだと思うし、多くの機能を学校に取り込んできた結果、生徒が学校に行けなくなると途端にそこにアクセスできないという問題になる。不登校の問題は学校の多機能化の裏返しと考えることもできる。

子どもに身につけさせたいプラスアルファの要素が増え、子どもに求めるスペックが上がり過ぎているとの指摘もある。学校が全てを引き受けるのではなく、「うちの学校は、何があってもこれはやりません」というアピールもひとつの方法。多機能化していく中でこのようなメッセージを出すことは、差別化の表現になる。

子どもの自己肯定感を高めるためには、普段の自分を他が認めてくれる、失敗してもそんな自分を認めてくれるといった体験が役立つと思っている。学校の教育活動に置き換えても、世の中の物差しがどのように変わろうとも、自校の価値観を持っているということが学校の自己肯定感となる。宗教を含め、そこにいてだけで自分が認められていると感じられれば、世の中の物差しに自分を当てはめる必要を感じなくて済む。学校がそのようなあり方を示すことが、子ども達の自己肯定感を高めることになるのだと思う。

不登校を取材して、将来に対する不安や絶望感から子どもがフリーズする構図を多く見てきた。彼らが世の中に絶望感を持っているのは、大人がそれを投影しているから。親や大人は、世の中で暗いニュースが流れていても、自分たちの生活を生き生きと過ごすことができるというメッセージを子どもたちに伝えていく必要があると思う。

学びの場において子どもが生き生きと活動するためには、自己選択の機会を持つことが重要。それが認められているという安心感が、生徒自身のポテンシャルの発揮を促すことにつながる。

自己選択には、意識的な選択と、思わず体が動いてしまうような無意識の選択とがあり、その両方を他が認めてあげる環境が必要だと思う。特に不登校の生徒が元気をとりもどしていくような状況では、無意識的な選択（アフォーダンス）を認めてあげることがより重要となる。将来を見据え、逆算して現在の進路を考えさせるような自己選択も見られるが、それをせずとも、子どもたちは自然にアフォーダンスする力を持っている。それを認めおもしろがってあげることが自己肯定感を高めることにもつながるのだと思う。

自己選択を考える場面では、自分で決められないことが悪、夢を待たないことが悪という脅しが向けられ、それにより子どもたちが苦しむことがないように気を付けなければならない。

以上